

英語英米文学科 推薦図書リスト（新入生向け）

1. アメリカ研究分野

■関口洋平先生のおすすめ：

矢口祐人『憧れのハワイ—日本人のハワイ観』（中央公論新社、2011年）

ハワイが日本人にとって「定番」の観光地となった裏側には、どのような歴史があったのでしょうか？ハワイに興味を持っている皆さんにぜひおすすめしたい一冊です。

アケミ・ジョンソン『アメリカン・ビレッジの夜—基地の町・沖縄に生きる女たち』（紀伊国屋書店、2021年）

「基地問題」というと難しそうだなと思われるかもしれませんが、この本は沖縄に生きる女性たちの生活と米軍基地の関係を具体的な言葉で語ってくれます。沖縄を通じて日米関係について考えてみませんか？

マイケル・サンデル『それをお金で買いますか—市場主義の限界』（ハヤカワ文庫、2014年）

「すべてのものがお金で買ってしまう世界」のなにが問題なのでしょう？格差の問題を理解するための、格好の入門書です。

■小泉泉先生のおすすめ：

マーク・トウェイン『ハックルベリーフィンの冒険』（出版社を問わず）

『トムソーヤの冒険』とセットで。トウェインは、アメリカ史においてもアメリカ文学史においてもぜひ。

アーネスト・ヘミングウェイ『われらの時代・男だけの世界—ヘミングウェイ全短編—』（新潮社、1996年）

トウェインと並んで名前くらいは知っていてほしい作家（笑）。短編集ですので読みやすく、ジェンダーについても取り上げて考えやすいかなと思います。

阿刀田高『ギリシア神話を知っていますか』（新潮社、1981年）

古典に少し馴染みやすいかなと思います。文学作品ばかりでなく、広く芸術作品を理解したり、楽しめるようになるように。

■梅崎透先生のおすすめ：

ベル・フックス（堀田碧訳）『フェミニズムはみんなのもの—情熱の政治学』（エトセトラブックス、2020年）

女性と男性が平等で、それぞれが生きやすい社会を作るための思想と運動。それがフェミニズムというシンプルだけれどもとても重要なメッセージ。

大和田俊之『アメリカ音楽の新しい地図』（筑摩書房、2021年）

テイラー・スウィフトはカントリー歌手？！ブルース・マーズは火星からやってきた？！2010年代以降のアメリカ音楽から、激変するアメリカ社会、文化を読み解く。

バーバラ・ランズビー（藤永康政訳）『ブラック・ライブズ・マター運動誕生の歴史』（彩流社、2022年）

いま、アメリカ社会では人種をめぐるなにがおこっているのか。BLM運動をアフリカ系アメリカ人史に位置づける著作。

■中川正紀先生のおすすめ：

鈴木透『スポーツ国家アメリカー民主主義と巨大ビジネスのはざままで』（中公新書、2018年）

スポーツ界での人種差別・性差別の撤廃の歴史を扱う一方で、巨大ビジネス化したプロスポーツの世界が抱える矛盾にも切り込みます。アメリカ合衆国にとってのスポーツの持つ意味が様々に知れ、米国の持つ別の顔を垣間見たような気持ちになれるのではないのでしょうか。

西山隆行『アメリカ政治講義』（筑摩書房、2018年）

現在、アメリカ合衆国で起こりつつある様々な社会問題を理解するために最低限知っておきたい米国政治の基本的常識を、「です、ます」調でやさしくわかりやすく解説されています。前半は政治の仕組みについて、後半は具体的な問題（世論とメディア、移民・人種・白人性、税金と社会福祉、宗教とモラル、銃規制など）について扱われています。

渡辺靖『白人ナショナリズムーアメリカを揺るがす「文化的反動」』（中公新書、2020年）

現在、ヒスパニックやアジア系をはじめとするマイノリティの人口急増や権利拡大の一方で、白人人口比や人口数自体が減少しつつある。多文化社会のなかで様々な意味で危機感を強め、白人至上主義を掲げる「反動勢力」の動向を民衆の視点から描いた本です。

■パトリック・ヘラー先生のおすすめ：

Shakespeare's *The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark and King Lear*.

These two plays remain important today by introducing us to complicated moral questions that unfold through the choices of the main characters.

T. S. Eliot's *Four Quartets* (Faber and Faber, 1944)

The four poems in this collection are complicated philosophical meditations on time and existence, religion, literature and spiritual renewal. Eliot is an immovable obstacle in 20th century world literature.

The Complete Poems of Emily Dickinson (Faber and Faber, 1975).

Dickinson's poetry remains vibrant and original even today. Her skill for surprising metaphors is unmatched in the history of American poetry.

2. イギリス研究分野

■近藤存志先生のおすすめ：

ニコラウス・ペヴスナー著、蛭川久康訳『英国美術の英国らしさ』（研究社、2014年）

イギリスの高名な美術史家ペヴスナーの手による一冊。イギリス芸術の特性と魅力が紹介されています。イギリス芸術関係の授業で良く取り上げられる名著です。

ヴィクトール・E・フランクフル著、池田香代子訳『夜と霧』（みすず書房、2014年）

ナチスの強制収容所での体験を、ユダヤ人精神分析学者が書き記した一冊。直接、イギリスの文化や芸術について記された本ではありません。しかしイギリスの芸術文化について考える導入として、毎年、注目する名著です。大学在学中に一度は、読んでほしい一冊です。ぜひ読んでください。

ケネス・クラーク著、高階秀爾訳『絵画の見かた』（白水社、2003年）

絵画の鑑賞法を、イギリスの高名な美術評論家クラークが紹介しています。一枚の絵画に込められた（あるいは隠された）メッセージを発見するヒントが見つかった一冊です。

■由井哲哉先生のおすすめ：

川崎寿彦『森のイングランド』（平凡社ライブラリー、1997年）

ロビン・フッド、シェイクスピア、ロマン派詩人などを論じながら、想像力の森という観点からイギリス文学史に斬り込んだ著作です。同じ著者の『庭のイングランド』とともに、イギリス文学に関心を持つ人なら、是非手に取ってほしい本です。

中野好夫『シェイクスピアの面白さ』（講談社文芸文庫、2017年）

「『ヴェニスの商人』のシャイロックを大阪弁で演じさせたらどうなるか？」など、シェイクスピアの登場人物を心理的にわかりやすく解説しながら、シェイクスピア作品の本質を浮かび上がらせる好著です。

喜志哲雄『シェイクスピアのたくらみ』（岩波新書、2008年）

シェイクスピアの劇作術を登場人物と観客の情報共有の観点から分析した本。シェイクスピアがどのように観客反応を操作しながら芝居を作っているかがわかって目から鱗の一冊です。

■富樫剛先生のおすすめ：

木下卓ほか編『イギリス文化 55 のキーワード』（ミネルヴァ書房、2009年）

佐久間康夫ほか編『概説イギリス文化史』（ミネルヴァ書房、2002年）

下楠昌哉編『イギリス文化入門』（三修社、2010年）

石塚久朗ほか編『イギリス文学入門』（三修社、2014年）

歴史・人種・階級・宗教・芸術・娯楽・言葉など、イギリスという国についての基礎情報をまとめた事典的な入門書です。一生懸命読むタイプの本ではありません。授業の発表やレポートのために必要なところを見る、暇な時にパラパラと拾い読みして基礎知識を集める、というかたちで気軽に手にとってみてください。

松島道也『図説ギリシア神話：神々の世界篇』（河出書房新社、2001年）

ヨーロッパ文化の土台にある神話と、それを扱う芸術作品がざっと概観できます。タイトルにあるとおり、図版を見るだけで楽しめます。

ソポクレス『オイディプス王・アンティゴネ』（新潮文庫、1984年）

ギリシャ悲劇、どれかひとつ読むなら『オイディプス王』で決まりです。ドイツの哲学者ヘーゲルが言うように、「失敗したらどうしよう、と考えること自体が失敗である」……そういうタイプの話です。

■向井秀忠先生のおすすめ：

板倉巖一郎『大学で読むハリー・ポッター』（松柏社、2012年）

大学では、ハリー・ポッターもジェンダー、人種、病気など、様々な視点から考えると、立派な「学問」になります。これまで読んでいたのとはまったく異なる作品に見えてくるから不思議。小説研究の最良の入門書です。

松本朗ほか編『イギリス文学と映画』（三修社、2019年）

小説と映画は切っても切れない密接な関係にあります。まずは映画を観て、気に入ったら原作を読んでみる、そんな入り方もいいですね。みなさん、知っています？ フランケンシュタインって、実は怪物の名前ではないんですよ。では、なぜ、そんなイメージになったのか？ 調べてみると興味深いです。『アメリカ文学と映画』もあります。

戸田慧『英米文学者と読む「約束のネバーランド」』（集英社新書、2020年）

『約束のネバーランド』が好きな人は、カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』（ハヤカワ epi 文庫）も読んで、次はこの本を。テキストがつながっていることがよくわかります。漫画やアニメ経由でイギリスの小説について考えるというのも、大学での学びの面白さです。

3. 英語学分野

■大畑甲太先生のおすすめ：

白井恭弘『ことばの力学——応用言語学への招待』（岩波新書、2013年）

「応用言語学」とはいったいどんな研究分野か、その全体像を掴むには最適な一冊。外国語教育、バイリンガリズム、異文化との接し方、法言語学、手話、言語障害など、幅広いトピックを通して応用言語学が扱う諸問題について紹介しています。

川原繁人『音とことばのふしぎな世界——メイド声から英語の達人まで』（岩波科学ライブラリー、2015年）

私たちにとって一番身近な言語現象は「音」ですね。言語学や音声学と聞くとなんか「難しそう」と思われるかもしれませんが、ちょっとした日常の例を使って言語音の世界を解説していますので、楽しみながら読み進めることが出来ます。

川添愛『ヒトの言葉 機械の言葉 「人工知能と話す」以前の言語学』（角川新書、2020年）

AIは人間の言語を本当に理解することが出来るのだろうか？そもそも私たち人間が、自分たちの使っている言葉のしくみやその「意味」を理解できているのだろうか？AIの発展が目覚ましいなか、「言葉とは何か」という疑問について考える一冊。

■饒平名尚子先生のおすすめ：

東照二『人を惹きつける言語戦略』（研究社、2009年）

周囲を惹きつける人とそうでない人のことばの使い方の違いを、テレビ番組の司会者、日本と海外の政治家、映画や広告などさまざまな例を使って解き明かします。言語学がどんなふうに私たちの身近なコミュニケーションのしくみを理解する助けになるかを示す本です。

中村桃子『翻訳がつくる日本語：ヒロインは「女ことば」を話し続ける』（白澤社、2013年）

著者はジェンダーと言語の関係を長年研究してきた社会言語学者です。ハーマイオニーは翻訳では「だわ」「～よ」と女ことばで話し（現代日本の若い女性たちは女ことばで話していないのでは？）、黒人の主人公は方言で訳される？・・・翻訳と社会・文化の関わりを考えさせられます。

鈴木孝夫『ことばと文化』（岩波新書、1973年）

ことばが文化とどのようにつながっているのか、身近な例を用いて解説した入門書。外国語と日本語を比較しながら、文化が違っていると発想や表現の仕方がどう違うのかを描き出します。ちょっと古いのですが今も読み継がれ、ことばと文化・社会の関わりを考える上ではとても良いスタートとなる本です。